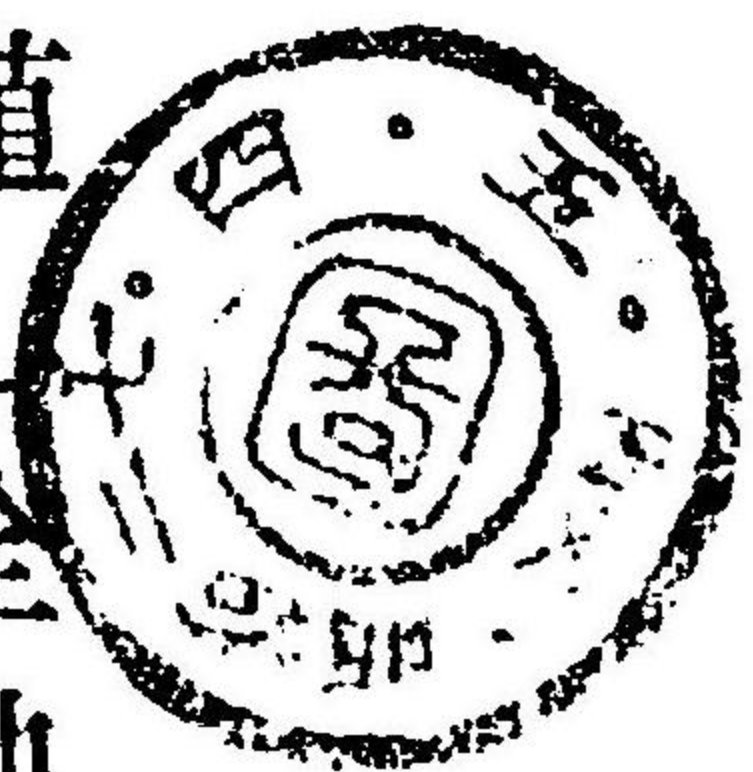


緒言

此書は今より凡そ二百年後には人口大に増殖し全地球に充滿して食料と住地とに缺乏を生じ遂に如何ともする能はざるに至るへしとの旨意を説けるものなるか伊は是等のことは余か常に専ら研究せんとすることには非ざれば余の考案としては殆どあることなく所謂愛賣の過ぎずして慰み半分の著述に類するものなれども然れども其説く所は悉く信據すへき専門學者の説を採取せるものなれば彼の基督教徒の世界亡滅



(二) 未來記又は往々一種の學者が著す所の未來想像記等  
と同日に論すべきものにあらざることば余か誓て保  
證する所なり

著者誌

## 目録

(三)

---

總論	
第一章	吾人の天文物理的運命
第二章	吾人の社會經濟的運命
第三章	結論

# 二百年後の吾人

文學博士 加藤弘之 著

## 總論

(一) 今日より凡そ二百年を経たる後には全地球の人口は増殖の極度に達し食料と住地とに缺乏を生して最早如何とすべからざる悲境に陥るべしとの説は近頃社會學經濟學統計學上の一大問題とならんとする有様なれば余は其理由の概畧に就て論述せんと欲することとなるか併し此ことを論ずるに就ては凡そ吾人々類

(二) なるものは本來此地球發達の太初より發生せしものにして又地球と共に永遠無窮に生存し得べきものなるや或は否らざるものなりやと云ふの理より説き起して夫れより本書の主旨たる二百年後の吾人の運命に説き及ほすを可なりと認むれば先づ第一章に於て吾人の天文・物理的運命を論し第二章に於て吾人の社會・經濟的運命を説き第三章に於て前二章の論旨を結了せんと欲す

### 第一章 吾人の天文・物理的運命

(三) 抑無邊無極なる大空中に不生不滅不増不減の物質なるものか存在し而して此物質か又不生不滅不増不減の勢力なるものを具備し此勢力の活動に由て天體と及ひ天體内の萬物とを組織せることなるか併し此不生不滅不増不減の物質より組織せらるゝ所の天體及び天體内の萬物は決して不生不滅不増不減にはあらずして時々刻々生滅消長盛衰榮枯の變化を受くる所以のものは抑如何なる原因に出る歟と云ふに唯不生不滅不増不減なる物質の勢力か時々刻々聚散分合増

(四)

減盈缺の作用をなすに由る所なり是故に物質なるものは全く不生不滅不増不減にして終始毫末の變化をも受くることなしと雖此物質より組織せらるゝ所の物躰即ち天躰と天躰内の萬物とに至りては時々刻々生滅消長盛衰榮枯の變化を受け常に新陳代謝して瞬時と雖同一の状態にして止まるものにはあらざるなり

無邊無極なる大空に繋れる恒星は肉眼を以て見るへきものと望遠鏡を用ひて始めて望み得へきものとを合して四百乃至五百億にも及ふことなれども吾人の

(五)

觀望し得へからざる最遠若くは最小なる恒星遊星衛星の類猶幾許あるへきや到底想像にも及ばざることなるか此無數の天躰か悉く終始其儘に存在するにばあらずして常に新陳代謝して止むときあらざるなり故を以て此無數の天躰中には今日將さに漸く天躰の形をなさんとするものもあり又既に全く天躰となり了れるものもあり或は將さに衰滅に歸せんとするものもありて宛かも此地球の人類中に將さに生誕せんとするものもあり既に生長せるものもあり又は既に老衰せるものもある等種々の状態あると均くして時

(六)

時刻々新陳代謝の變化を爲しつゝあるなり佛説に世界の生滅消長を説て成住壞空の四段に分けしは理學的研究に出てたるにはあらざれども自ら眞理に合する所ありと云ふも可なり又近頃の發明に據れば天體相互の間にも地球上萬物の間に於けると同く生存競争自然淘汰の作用ありて其生滅消長を制するものなりと云ふ

天體生滅消長の變化は固より一定不變の天則によりて支配せらるゝものなれば其恒星たると遊星衛星たるとを問はず其大體の理に於て絶て異同あらざるこ

となれども今特に一遊星たる吾か地球の生滅消長の序次に就て概要を擧ぐれば即ち左の如し

第一期 瓦斯の時代

第二期 火炎の時代

第三期 火炎漸く衰滅して表面の熱漸く去りつゝある時代

第四期 内部に残存せる火炎表面に噴出する時代

第五期 表面の熱大に減し水、空氣生し且つ太陽の光と熱とを適宜に受くることゝなれるか爲めに有機物の發生繁殖する時代

(七)

## 第六期

地球は即ち今日此時代にある  
 回轉の速力漸く遲緩となり且つ水、空氣漸く減する時代

但し回轉の速力は既に第五期に於て稍遲緩となり始めたり故を以て輓近天文學者の發明によれば二千年以來日時の延長せること一秒時の八十五分一なりと云ふ  
 太陽の光熱漸く減するか爲めに有機物の次第に衰滅に赴く時代  
 第八期 全く枯躰となる時代

## 第九期

## 亡滅の時代

但し地球は本來太陽より分裂して一個躰となりしものなるか更に漸く太陽の爲めに引かれて遂に太陽と合するものなるへしと云ふ

吾か地球か生滅消長する所以の順序は大略此の如きものなるか偕然らば今日は如何なる時期にある歟と云ふに最早全く第四期を去て第五期に在ることにして表面の火炎は既に全く消滅し唯内部に猶多少の火炎を存するか故に時々噴出あり又之れか爲めに地震

の起ることもあれども併し是等のことも決して甚たしきにあらず且つ水、空氣生し又太陽の光と熱を受くることも適宜となりたるを以て既に有機物の發生繁殖に相應するものとなりしなり(但し有機物の發生繁殖には水、空氣、光、熱等の外に猶種々の要件あることなれども専ら天文、物理學上に涉れることなれば之を畧す)又地球の年齢に就ては諸學者の説大異同ありて一定せず或は六拾億年或は貳拾億年又は纔に壹億年と云ふ但しヘルムホルツが詳細に計算せる所は更に少なくして六千八百參拾六万五千年なりと云ふ

右の如く吾が地球は今日既に全く第四期を去て第五期に移れることなるか此第五期となるに至りて更に地層發達の順序により五代十四紀なるもの生したり即ち左の如し

原始代

ヘンマ岩紀

カムプリア紀

シルリア紀

本代に於て下等動物始めて發生す

第一代



デフオン紀

石炭紀

二疊紀

本代に於て魚、兩生物、羊齒植物等發生す

第二代

三疊紀

ジュラ紀

白堊紀

本代に於て爬蟲類、裸子植物類發生す

第三代

始新紀

中新紀

最新紀

本代に於て哺乳動物、有花植物等發生す

第四代

洪積紀

沖積紀

本代に於て人類發生す但し或は既に第三代に發生せしなるへしとの説もあり

右各代の年數は之を知ることを能はされとも其長短の

百分比例は左の如くなるへしと云ふ

原始代	五、參、六
第一代	參、貳、壹
第二代	壹、壹、五
第三代	貳、參
第四代	〇、五
總計	壹、〇、〇

ヘッケルの説に據れば既に原始代のヘンマ岩紀に於て有機物の太始祖とも云ふへき極めて簡單粗劣なる有機物即ちモ子ラと稱するものか炭素酸素水素窒素

の無機的親和より發生したるものなりと云ふ而して此太始祖が無機的親和より發生せし以來漸く有機物の進化發達を來たして高等有機物の生ずることゝなり最後に萬物の靈長と稱せらるゝ吾人々類の出たることにしてヘッケルは太始祖たるモ子ラより吾人類に至る迄の進化を解剖學的に研究して人類をモ子ラ以來第二十二世の苗裔となせしことなるか抑此進化は如何にして出來たるやと尋ぬるに言ふ迄もななく生存競争自然淘汰の作用に外ならざるなり但し動植の二物か生存競争自然淘汰の作用によりて漸々進

化したるの理は世の普く知るか如くダル井ンの發明に係ると雖又地學の碩學ライエルの發明によりて地層の漸次發達したるの理明瞭となり隨て地學化石學の進歩を來たせしより前述地層代紀の次第に新なるに隨ひ次第に高等なる動植物の化石を發見することを得たりしかば是れに由て動植物進化の理は益確實なるものとなりたり

果して然らば萬物の靈長と稱せらるゝ吾人々類は何れの代紀に於て如何なる動物より直接に進化したるやと云ふの問題に就て論述せん此ことに就ては未

た十分確定せる説はあらざれども恐らくは第三代の中新紀より第四代の洪積紀の間に於て最高等の猿猴の類より進化したるならんと云ふ歐羅巴の中央にては第四代洪積紀に人類か今日既に斷滅せる哺乳動物例へば一種の象の類と共に生存したることは其の化石の發掘によりて疑ふ所なしと云ふ但し人類始生の場處に就ては數種の説ありてダル井ンは亞弗利加の内なるへしと云ひクアトルフェーデは亞細亞の北方なるへしと云ひ又ヘツケルは亞細亞南方にて今は印度洋となれるレムリアと云へる處ならんと云ふ

又人類の祖先は亞細亞の南部に生存するオラング。  
 ギッボン 亞弗利加に生存するゴリラ。シンパンセー  
 杯云へる無尾の高等猿猴即ち似人猿と稱するもの、  
 類には相違なきも併しヘツケルの解剖學的研究によ  
 れば是等の高等猿猴より進化して直に人類が生した  
 るにはあらずして右高等猿猴より進化せる似猿人と  
 云ふべき一種の半猿半人の如きものありて此半猿半  
 人より進化して眞人類即ち吾人となりたるならん而  
 して此半猿半人は其後眞人類との生存競争によりて  
 遂に斷滅に歸したるものならんと云ふ蓋し此半猿半

人は既に直立行歩をなすことを得たれども併し眞の  
 言語即ち綴音言語を發することは未だ爲し得ざりし  
 ならんとてヘツケルは此半猿半人を無言語の人類と  
 稱し眞人類を有言語の人類と稱したり但し人類數源  
 説を主張する學者は人類を以て決して一種の猿猴の  
 類より進化したるに非ずして數種の猿猴の類より進  
 化したるものなれば數人種は皆其本源を異にするも  
 のなりと説くことなれども近來は此數源論は大抵消  
 滅して一源論に歸することとなりたり  
 人類始生の時は第三代の中新紀より第四代の洪積紀

迄の間なるへしとのことは既に述へしか其始生の時より今日迄の年數に至りては決して十分確實なることを知る能はされども蓋し拾万乃至貳拾万年位なるへしと云ふ而して爾來其始生の一地方より次第に諸方に蔓延して遂に全地球を以て其住所となし其知能の發達により萬物の靈長となりて萬物を制し已れに益あるものは取て之を利用し已れに害あるものは驅除して其害を避け只管已れの進歩を遂くることをのみ是れ務むることとなりしか偕本來動物より出てたる苗裔にして其知能か斯く迄進歩して全く動物と大

懸隔をなすに至りたる其根元は抑何にある歟と云ふに其最も重なるものは眞言語即ち綴音言語の出來たることと并に直立行歩をなすに至りて手足の分業したることにあるなり蓋し吾人か他の動物の未だ曾て得る能はさる所の眞言語なるものを得て人々互に其意思を精密に且つ確實に傳ふることの出來ることとなりたると并に同く他の動物の未だ曾て得る能はさる所の直立行歩及び手足の分業を得て手と足と各其執る所の業務を異にして其業務の迅速且つ容易なることとなりたるより此二大進歩が非常に吾人の

腦の發達を促し隨て智力の大進歩を來たすことゝなりて偕こそ眞言語を有せず又直立行歩をなす能はざる所の動物とは實に天地の懸隔あるもの即ち所謂萬物の靈長とはなりしなり然るに吾人は自己自身の由來を知る能はずして本來萬物の靈長として創造せられて萬物は全く吾人の利用の爲めに創造せられたるものなりと迄誤認することゝはなりたり  
 但し野蠻未開人民に至りては其智力も未だ殆ど開けずして動物を距ること未だ甚だ遠からざるものもあるなれども併し其腦の發達は既に他の動物と同日に

論すへきものにあらざるは解剖學に於て明瞭なることなるか然るに開化の進むに隨ひ腦の發達は頗る驚くへきものにして人類學者人種學者等か未開人民と開明人民との腦を比較研究するに其大小輕重及ひ組織等は非常の懸隔あり而して開明人民の腦は猶次第に發達するの力ありと云ふ佛國にてナポレオン三世の時に巴里の市區改正をなすに方り葬地を發掘せしとき人類學者プロカカ六百年以來の死躰に就て腦を調査研究せしに概して百年毎に腦の増大したるを見せしと云ふ

前述の如く人類は數處に於て數種の猿猴の類より進化したるにはあらずして必ず一地に於て一種の猿猴の類より進化したるものなるへしとの説即ち之を約言すれば人類一源の説は今日専ら學者間の信用を得る所のものなるか偕然らば何故に今日世界に種々の人種ありて各其毛髮の性皮膚の色又は骨格等を異にするものなるやと云ふに此人種派分のことに至りては今日未だ一定の確説はあらされとも蓋し生存競争自然淘汰の作用により同一人類中漸く優劣の異同を生ずるに隨て次第に分派し且つ其居住地を異にする

こととなりしより更に土地の氣候位置形狀其他萬般なる周邊の狀況により種々の影響を受けて毛髮の性皮膚の色及び骨格等の異別愈増大するに至りたるならんと云ふ而して人種の種類に就てはブルーマンバフは膚色の異同によりて五人種に區分せしかとも今日の學者は之を學理に合せずとして取らずして毛髮の性皮膚の色又は腦蓋の形狀等其他種々の方法によりて區分するか故に人種の數も種々にして一定せざることなるか是等のことは本書の主要にあらされは茲には詳説せざるへし併し人種派分の原因は如何も

あれ現に今日全地球に優劣の諸人種が同住することにして其開化進歩の度も非常に懸隔し其優等なるものは全歐洲及び亞細亞の一部分に住する人民にして亞弗利加亞米利加濠大利及び南洋諸島等に住するものは皆劣等に屬する人種なり

但し此優劣諸人種中には古來生存競争自然淘汰の絶へず行はれ居ることなれば劣等人種にして優等人種と競争する能はさるものは既に全く亡滅に歸して今日其痕跡を止めさるものも必ず多かるへしと云ふ加之現に近來に至りて始めて亡滅に歸したる野蠻人種

もあり又將さに亡滅に歸せんとして漸く人口の減少しつゝある人種もあるなり蓋し近來歐人が頻に野蠻人民の土地を奪掠して殖民地を開くこととなり其地に往來して土人と接すること日を追て盛なるに至りしより其地に未曾有の傳染病流行することとなり又は其土人が未曾有の飲料食料等をも多少用ふることとなりたる等の爲めに漸く身體の衰弱及び懷妊の減少を來すの結果を生し加之歐人と土人との知識の度か天地霄壤の差ひあるか爲めに到底歐人の壓倒に抗抵するの力足らざる等心身兩面に於ける生存競争に



よりて野蠻人種は次第に人口を減し甚たしきは遂に  
 斷滅するにも至りしなり彼の布哇の如きは凡そ百餘  
 年前にクックか始めて此島を發見せし頃には凡そ三  
 十万前後の人口ありたるに今日に至りては土人は僅  
 僅三四万に迄減することとなりたり布哇土人の如き  
 は他の野蠻人に比すれば大に優る所ありと見へ僅々  
 百餘年間に今日の開化に迄進みたることなれども夫  
 れさへ此の如き有様なるのみならず更に知能的競争  
 に於て到底歐人と拮抗する能はさるより今日は遂に  
 歐人の爲めに全く政權をも奪はるることとなれり

右の如き理由なれば太初一源より出てたる人類は漸  
 く派分して數種の優劣人種となり此優劣兩種の生存  
 競争によりて次第に劣等人種か亡滅に歸すること  
 なるときは亞細亞の優等人種并に歐人種か全地球を  
 押領することとなりて此優等人種と高等猿猴との中  
 間には最早劣等人種を見さることとなるへきか故に  
 人類と高等猿猴との懸隔は今日に比して更に大なる  
 ものとなるならん

諸右の如く漸次優等人種か劣等人種を倒して獨り全  
 地球を押領するに至るは敢て疑ふへきにあらざるも

併し優等人種中にも更に優劣の分かるゝことなれば其間の競争も亦決して止むときなきのみならず益劇烈となりて隨て自然淘汰の作用によりて更に益優等なる人種が生ずるに至るべく此の如くして數千万年を経るときは遂に如何なる優等人種が出つへきや實に想像し能はざる程のことなり但し吾人々類が嘗て生存競争自然淘汰の結果によりて似猿人即ち半猿半人より進化し來りたるか如く猶將來の生存競争自然淘汰によりて吾人々類が更に人類以上の一種の靈物に迄進化し得へきや否のことに至りては進化學者の

大問題に屬することなれども今日に於ては假定説と認むへきものさへも未だ出てさることなるか併し開は兎も角も獨り腦の進歩發達は將來實に驚くへき點に迄至るならんと言ふ  
 諸此の如く將來猶漸々進歩發達すへき人類か此地球の亡滅の時に至る迄猶生存し得へきものなるや否と云ふに蓋し決して斯く永く生存し得へからざる道理の明かに存するなり开は如何なる理由そと云ふに既に論述したるか如く地球上の有機物は地球生滅消長の第五期(即ち現今の期中)地層發達の原始代のヘンマ

岩紀に至りて始めて無機物より發生し而して吾人々類は第三代の中新紀より第五代の洪積紀の間に於て始めて半猿半人より進化して此地球に出てたることなるか蓋し有機物の生存に就て最も必要なものは光、熱、水、空氣等なるに宛かも右第五期は是等のものか有機物の生存に最も相應することゝなりしか故に此時に至りて有機物が始めて生し夫れより漸く進化して遂に今日現に吾人々類か此地球上に安穩快樂に生存し居るのみならず更に益進歩發達しつゝあることなれども併し此第五期は決して永遠無窮にはあらず

して更に第六期第七期の來るへきは疑ふへからざることなるか偕第六期は如何なる時歟と云ふに前に擧ぐるか如く地球回轉の速力漸く遲緩となり且つ水、空氣の次第に減する時代又第七期は如何と云ふに太陽の光、熱、か漸く減して有機物の衰滅に赴く時代なれば此時に至りては人類は萬種の有機物と共に其生存に極めて必要缺くへからざる光、熱、水、空氣を適宜に受くること能はざるか爲めに到底亡滅に歸せざるへからざることゝなるなり但し人類は下等有機物の如き簡單粗劣のものとは異にして生存の需要を充たすこと

甚だ容易ならされば或は最も早く亡滅するに至るや  
も知るへからず

儲然らば有機物か遂に亡滅に歸すへき時期は今より  
凡そ幾許年數の後にあるへきやと云ふに諸學者の説  
によれば今より太約千七百万年乃至貳千万年の後な  
るへしと云ふことなるか併し人類は前述の理由によ  
り更に早く亡滅すへしと假定するも必ず數百万年の  
年數はあるへければ吾人は決して今日より甚だ憂慮  
するを要せざるへし蓋し人類の始めて此地球に生れ  
出てたるは前述の如く今より太約拾万年乃至貳拾万

年前にあることなれば此後吾人の生存し得へき年數  
を僅々百万年とするも従前に數倍する道理にして人  
類の年齢は猶甚だ幼稚なりと云ふも可なり但し一般  
有機物及び人類か生存の力を失ふは決して俄然とし  
て來るものにあらず光、熱、水、空氣等か漸く減するに隨  
て生存の力も亦漸く衰弱するは必然のことなれば吾  
人か亡滅の時に至る迄猶依然として盛に生存する能  
はざるは勿論なりと知るへし

右の如く一般有機物及び人類共に早晚全く亡滅して  
此地球上に遂に一の有機物をも見ざることゝなるは

敢て疑ふへからすと雖併し此時期を以て無邊無極の大空間に一の有機物をも見ざるの時期とはなすへからず此大空間には恐らくは有機物の全く斷滅する時期はあらざるへしと思はるゝなり何となれば既に論述したるか如く此大空間に繋る所の千萬無量の天躰は終始新陳代謝するものにして將さに漸く天躰となりんとするものあれば既に全く天躰となり了れるものもあり又は將さに衰滅に歸せんとするものもありて宛かも人類界に於て老壯幼か漸次新陳代謝すると均しき有様なれば吾か地球の今日と同じき進歩發達

の時期に達して光、熱、水、空氣等か適宜に存し及ひ其他有機物の生存に缺くへからざる種々の要件の具はれる天躰には獨り一般有機物のみならず人類さへも必ず發生せざるへからざるは天則に於て已むへからざることなればなり他の天躰に一般有機物及ひ人類の生存すへきものなるや否のことに就ては從來學者か研究を怠らざることなるか近來光線分析術の發明によりて天躰に存在せる元素か吾か地球に存在せる元素と毫も異なることなきの確證を得たることにして諸天躰と吾か地球とか全く同一の性質を有するもの

なることは最早疑ふへからさることとなりたれば斯く全く同一なる性質のものか全く同一なる境遇に接して全く同一なる進歩をなすの理も亦疑ふへきに非ざるへし而して此理より推考すれば他の天体にも亦有機物の發生すへき時期決して無しと云ふへからず苟くも他の天体にも有機物の發生すへき時期ありとする以上は獨り人類か發生すへからさる理は固より決してあらざるなり吾か地球に最も近き一遊星なる火星には一般有機物は勿論人類も亦必ず生存するなるへしと云ふ加之火星は地球よりも小なるを以て其

表面の熱の減することも早かりしかば其發達も隨て早かりしことなれば今日の火星の人類は地球の人類よりも更に數層發達せしものならんとの推測説もあることなり  
 諸此火星の人類のことに就き近頃佛國に面白き訴訟起りたり开は如何なることそと云ふに學士某か天文の學説を通俗的に著述せる中に近頃火星の表面の數個處に度々三角形若くは四角形の光點を見ることなるか是れば恐らくは火星の人類か吾か地球の人類と交際を試みんとするの記票ならんと云へることを述

へしに貴婦人某頗る之れに感し若しも火星の人類と地球の人類と直に交際をなすの術を發明する者あらば吾か遺産拾万フラン(凡そ參万餘圓)を賞金として與ふへしとの旨を廣告したりしかば貴婦人の遺産相續人某は之を不當のこととして訴訟を起せしなり然れども學士某の言ふか如く火星の表面に現はるゝ三角形若くは四角形の光點か果して其人類か地球の人類に向て施せる記票なりとすれば吾人か之れに應答せんとするには少なくとも伊太利のシ、リー島程の大きさなる光燈を設けさるへからす然るに是程の光燈を

設けんとするには拾万乃至貳參拾万フランの金は物の數にも足らさることなりと云ふ其他火星の人類と地球の人類との交際に就て種々の考案をなせし學者も往々なきにあらざれども未だ曾て之を實行すること能はさるなり  
既に論したるか如く一般有機物并に人類は獨り此地球にのみ生すへきものに非ずして有機物の生存に適宜なる光、熱、水、空氣及び其他の要件の具備する天體には必ず生すへきものなれば一般有機物及び人類は此地球の未だ出來さる數億万年の前にも他の或る天體

には必ず生したることなるべく又此地球の亡滅より  
 數億万年の後にも他の或る天體には必ず生すへきこ  
 となるへければ此地球の人類即ち吾人か今より千七  
 百万年乃至貳千万年の後若くは更に早く全く亡滅に  
 歸することあるも吾か同胞は此宇宙間何れの天體に  
 歟必ず生存して永遠全く亡滅するの期はあらざるへ  
 しと思はるゝなり

## 第二章 吾人の社會經濟的運命

前章に於ては吾人々類の發生并に亡滅の理を天文物  
 理的に研究して人類の運命猶甚た長遠なる所以を證  
 明したることなるか然るに更に研究の方法を轉して  
 吾人の運命を社會經濟的に研究するときば吾人の運  
 命は殆ど旦夕に迫れるか如き思ひを起さゝるを得さ  
 るの結果を見ることゝなるなり

英國の經濟學者マルサスは人口増殖論を著して人口  
 は凡そ二十五年毎に等比的に増殖し又之れか食料は  
 之に反して等差的に増殖するものなるを以て遂に食



料の缺乏を生して如何ともする能はさるの時運に際  
 會すへきことを論したり其比例は例へば明治二十七  
 年に日本の人口四千万あり之れか重もなる食料たる  
 米四千万石ありとすれば今より百年の後は遂に左  
 の如き大差を生ずることとなるなり

	人口(等比的増殖)	米(等差的増殖)
明治二十七年	四千万	四千万石
同 五十二年	八千万	八千万石
同 七十七年	壹億六千万	壹億貳千万石
同 百二年	參億貳千万	壹億六千万石

同 百二十七年 六億四千万 貳億石

マルサスカ右の如く人口と食料とに就き等比的増殖  
 と等差的増殖の異同ある所以を論究せしより人口増  
 殖論は經濟學上に於ける大問題となり爾來反對論者  
 も多く種々の駁論も出てしことなるか畢竟マルサス  
 の論したるか如く二十五年毎に等比的の増殖をなす  
 程にはあらざるべく且つ人種の異同其他種々の原因  
 によりて増殖にも亦異同あることなれども併し人口  
 の増殖は概して随分大なるものにして決して輕々看  
 過すへきものにあらざるなり

凡そ此地球上に一般有機物の生誕する數は非常に大なるものにして殊に下等の有機物に至りては其生誕の數實に驚くべきものなるか本書に於て甚だ緊要とする程にはあらされとも有機物増殖の非常に大なる所以を示さんか爲めに最下等有機物なる所謂黴菌(顯微鏡を用ひて始て見るべき有機物)の増殖に就て一例を擧げんに此黴菌の生誕は兩姓の交接に因れる生殖にはあらず唯一個體の分裂によりて出来るものなるか一個の黴菌が分裂して一時間に二個となり二時間に四個となり三時間に八個となり四時間に十六個と

なるか如く即ち等比的に分裂増殖して遂に七十二時間即ち三日間には百七拾京(萬億を一兆とし萬兆を一京とす)と云ふ驚くべき數(壹七〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇)となるなり而して百二十時間即ち五日間を経たる後には地球の五大洋に充滿する程の大數に至りて到底計算し得へからざるものとなるべき筈なり然るに此無數の黴菌は五日前に纔に一個の黴菌より分裂増殖せしものに外ならざるなり  
 黴菌増殖の理は前述の如くなるに何故に實際に於て此の如く増殖することあらざる歟と其理由を尋ぬる

に是れ即ち生存競争自然淘汰の結果に因る所なり。微生物は本來右の比例に生誕するには相違なきも實に其比例を以て増殖すること能はざる所以の重なる原因は即ち此微生物の營養となるべきものゝ甚だ不十分なるか爲めに獨り營養を資取するに堪ふべき強壯なる微生物のみか營養を資取して生存し營養を資取するに堪へざる不強壯なる微生物は全く營養を資取する能はずして枯死するものにして即ち多くは生存競争自然淘汰の作用に因由する所なり。

右の如く唯一個の顯微鏡的至微至小の有機物なる微

菌さへも五日間にして地球の五大洋に充滿する程に増殖すべき筈なれども有機物發生以來無數の年所を経たる今日に至る迄遂に此の如く増殖する能はざる所以のものは蓋し前述生存競争自然淘汰の結果に出ることなるか其他萬種の有機物も亦日々生誕する數は實に驚くべきものなるへけれども決して其比例に増殖する能はずして纔に數億万分の一か辛うして生長するを得るは殊に營養物の缺乏なるか爲めに獨り最小數の強壯なるものゝみ能く營養を資取して生長し其他大數の不強壯なるものは全く營養を資取する

能はずして遂に死亡するか爲めに外ならざるなり支那にては天地好生之徳と歟天地之生々と歟又は天地之大徳曰生と歟唱へて天地は萬物を生育するの大徳を具するものと思ひしことなれども其實際の有様を見れば始と反對にして天地は能く無数の有機物を生すれども之を生育すること能はずして其大多數を殺し纔に其最少數を生育するものなれば天地好殺之徳と歟天地之殺々と歟天地之大徳曰殺と歟云ふこそ却て適當なるへしと思はるゝ程のことにして天地の經濟は甚だ不整備を極めたるものと云はざるへからさ

るなり蓋し此一事にても造化に目的ありとする所の所謂目的主義なるものゝ大誤謬たるは明々白々にして造化は所謂因果の天則に支配せられて毫も目的を具するものに非ざるを知るへきなり何となれば蓋し若し造化に目的の存するものとするれば到底生育し能はざる大多數の有機物を生して直に之を殺すか如きは決して解すへからざるものなればなり然るに造化は決して目的あるものにあらずして全く因果の天則に支配せらるゝものなるか故に斯く無数に生誕せる有機物の營養の缺乏によりて其間に生存

競争起り獨り強壯なるものゝみ營養を資取して生存し不强壯なるものは營養を資取する能はずして死亡するの自然淘汰を生ずることゝなるものにして此生存競争自然淘汰こそは即ち有機物の進化を生ずる原因にして有機物發生以來漸次高等の有機物を生し最後に吾人々類の出るに至りしも即ち全くこれか爲めなり若しも地球上に生誕する有機物の營養か毫も缺乏することなく常に十分なりしならば有機物界に生存競争の起るべき道理殆どあらざれば隨て自然淘汰の起るべき道理もあらず又進化なるものゝあるべき

道理もなかるべきなり彼ダル井ンは有機物界の進化か殊に有機物の生誕の數と其營養物との不權衡より起れる生存競争の結果なる所以を發明せしことなるか开は同氏か偶然にマルサスの人口増殖論を讀て有機物の増殖と其營養物との不權衡も必ず人類の増殖と其食物との不權衡に異なる所あらざるか爲めに生存競争の起ることなるへしとの考を生したるに基因せしものなり

人類界にありても野蠻社會にては全く純然たる天則の行はるゝこと動物界と異ならざるか故に生殖せし

人口中食物缺乏の爲めに生育を遂ぐることを能はずして死亡する者決して少からず而して之か爲めに生存競争自然淘汰の結果を見ることにして多くは獨り強壯なる者のみ食物を得て生存し不强壯なる者は之を得る能ずして死亡するに至るなり加之野蠻社會にては經濟未だ開けずして夥多の人口を養ひ難きより生兒殊に將來勞動に適せざるべき女兒を殺すの風盛行はるゝことにして決して之を惡事となさざる程のことなり開明社會にてすら所謂墮胎なるもの行はれて胎兒を殺して生誕を防ぐことあり吾か邦にも昔時

は随分行はれたることなるか亞米利加にても盛に行はるゝことなりと云ふ但し半開以上の社會に至りては婚姻の制限も粗定まり又道德法律も多少開け人智も多少進み且つ活計の困難を感ずること少からざる等の爲めに私通野合の如き惡風俗も多少制限せらるゝ所ありて決して動物界の自然の有様と同日に論ずべきにあらざれば爲めに生兒の數の大に減少するには相違なきも併し生殖力なるものは頗る強大なるか故に人口の増殖は非常に迅速なるを免るゝこと能はず殊に開明社會に至りては經濟の道既に大に具備

するを以て増殖の勢は益大なるものとなるなり  
 人口の増殖か假令マルサスの言へる如く二十五年毎  
 に等比的の増殖を爲さしるも其迅速なることの決して  
 掩ふへからざる事實なる以上は人口と食料との比  
 例は益大なる異同を生ずること敢て疑ふへからされ  
 は遂に食料の大缺乏を生ずるに至るへきは決して免  
 るへからざるなり地理學者兼統計學者なるレブンス  
 タインか西曆千八百九十年に英國の地理學會に提出  
 せる調査に據れば現今全地球の人口は左の如しと云  
 ふ

亞細亞

八億五千万人

歐羅巴

參億六千貳拾万人

亞弗利加

壹億貳千七百万人

濠大利

七百七拾參万人

北亞米利加

八千九百貳拾五万人

南亞米利加

參千六百五拾万人

總計拾四億六千七百五拾万人(但し分計と總計と

其數相合せされども恐らくは數字の誤植に出る

ならん)

諸此人口の増殖は如何と云ふに現今の有様にては大

約毎十年に百分の八を増加するものとして大なる相違あらすとすれば西暦千八百九十年(調査をなせし年)より百八十二年の後即ち西暦貳千七百二十二年には全地球の人口左の如くなるへし即ち

貳拾兆七千貳百五拾九億九千四百万人(貳〇、七貳五、

九九四、〇〇〇、〇〇〇)

然るに眼を轉して此人口を養ひ得へき食料の如何を調査するに全地球上耕作及び牧畜に適すへき面積及び礫确沙漠等にして全く是等のことに適せざる面積左の如し(但し南北兩極の近邊を除く)

○耕作牧畜に最も適すへき面積 貳千八百四拾六万九千英方哩

○辛うして耕作牧畜に適すへき面積 千參百九拾万千英方哩

○耕作牧畜に全く適せざる面積 四百拾八万英方哩

右の如くなれば前二種の耕作牧畜に適すへき面積は合して纔に四千貳百參拾七万英方哩となることなるか是丈けの面積は若し將來農業經濟上に於て今日豫想すへからざる別種の進歩あらざる以上は前述百八十二年後の人口即ち貳拾兆七千貳百五拾九億九千四百万より多き人口を養ふに足るへき食料を供することば出來ざる筈なりと云ふ



余は未だレブンスタインの調査書を讀まず唯雜誌にて其概要を知りたるのみなれば同氏か全地球の人口の増殖を毎十年に百分の八としたるは如何なる目安より計算したるものなるや其詳細なることを知らずと雖併し野蠻人種は前章に述べたるか如く近年歐人種との交通開けし以來頗る人口の増殖の減したるのみならず遂に殆ど斷滅せんとする人種又は既に全く斷滅したる人種もある程のことにして自今歐人種の殖民の益盛なるに至らば野蠻人種は遂に殆ど斷滅に歸するやも知るへからず(但し獨り黑人種は身軀頗る

強壯にして從來歐人種との交通の爲めに人口の減少するか如きことも殆ど少なき由なれば此人種は他の人種と同一に論すへからざるものあらん然れども野蠻人種の減滅するに引換へ歐人種は自今殖民事業の益進歩するに隨ひ其生計の新泉源も生ずることなれば其人口の増殖は更に益加はりて遂に毎十年に百分の八を超過するやも知るへからず  
ストレツケルの世界及ひ人類と題せる著書に據れば歐洲にては近年戦争の數次第に減し又醫術衛生の學術大に開けたるか爲めに流行病及ひ其他の病患大に

減し又不治の疾と稱せしものも往々快癒の効を奏することとなり并に備荒貯蓄其他貧民救助の方法等も具備せし等のことより生存の平均數著く増加するに至りしかば爲めに人口の増殖甚たしく歐洲の各國にて毎年百分の壹若くは百分の零五の増加を見ることとなり又北米合衆國の如きは歐洲より入り來る數多きを以て百分の貳五を増す有様なれば將來の増殖は實に驚くべきものなるへしと云ふ

ストレッケルの書に據れば歐洲強大國及ひ北米合衆國の現今(西曆千八百九十年若くは九十一年)の人口と

今より凡そ百年後に増殖すべき人口との比例太約左表の如し但し表中甲は現今の人口乙は百年後の人口なり

露國 西比利亞を加ふ

- 甲 一億千九百參万貳千七百五拾人
- 乙 五億人

獨乙

- 甲 四千九百四拾貳万八千四百七拾人
- 乙 壹億五千万人

英國 殖民地を除く

- 甲 參千七百八拾八万七百六拾四人
- 乙 七千七百万人

佛國 殖民地を除く

甲 參千八百參拾四万參千九拾貳人

乙 五千貳百万人

甲 六千貳百九拾八万貳千貳百四拾四人

乙 七億參千万人

合衆國

其他支那の如きも増殖甚た盛なる人民なれば現今太約參億六千万ある所の人口か百年の後は非常なる數となることなるへく又日本の如きも最も盛に増殖する所の人民にして明治五年より二十五年迄左の如く増殖せり

明治五年

參千參百拾壹万八百貳拾五人

同 十五年

參千六百七拾万百拾八人

同 二十五年

四千百八万九千九百四拾人

右の如くなれば即ち毎十年に百分の拾以上を増加したることなるか併し吾か邦の統計は近年漸く整備せしものにして十數年前迄は十分正確なりと云ふへからされは明治五年より二十五年迄僅々二十年間の統計を土臺として將來を豫測するは甚た難けれども先づ右の比例に據りて考ふるときは今より百年後には必ず一億以上に達せざるへからざるなり殊に吾か邦の如きも醫術衛生漸く進歩の効を奏することなれば

病患も次第に減すべく又備荒貯蓄其他貧民救助の方  
 法も益進歩すへければ生存平均數の次第に増加する  
 は敢て疑ふべきにあらざれば右の豫測は蓋し大に誤  
 ることあらざるべし  
 右の理由なれば假令野蠻人種の減滅するものあるも  
 優等人種は之れに反して益増殖すること必然なれば  
 此増殖に應じて食料も亦増殖するに非ざる以上は増  
 殖する所の人口か到底生存し得べきの術あらざるは  
 論を俟たざるなり尤も農業化學農業經濟學等の進歩  
 も自今益著大なるべくして今より百年をも経る間に

は非常の進歩をなすへきは疑ひなかるべしと雖去迎  
 前述の如く全地球中耕作牧畜に適すへき土地に限り  
 ある以上は右等の學術か假令如何に進歩するも遂に  
 は此學術を施すへき手段なきに至るべし併し假令此  
 學術を施すへき手段ありて益増殖する人口を養ふの  
 食料を得ること甚た難からざるべしと假定して考ふ  
 るも限りある土地に限りなき人口を容るべからざる  
 を如何すへきストレッケルは其著書に亞細亞亞弗利  
 加の内部には今日猶人民の住せざる土地甚た多けれ  
 ども是等は到底耕作牧畜に適せざる礫确沙漠等なれ

は如何ともすへからず又濠大利の大半亞弗利加南方の一部南亞米利加の西部並に合衆國墨士哥の一部等の如きは降雨に乏しければ決して耕作牧畜に適するものにあらず其他酷暑嚴寒の地の如きは暖帯に生誕せる亞細亞歐羅巴人等か能く移住し得へき土地にあらずされば到底如何ともすへからずと述へしか是等は即ち前述レブンスティンか全く耕作牧畜に不適當と看做せる四百拾八万方英哩の内に屬するものなるへければ人類の住居し得へき地は案外に狹隘なることなれば到底無盡藏なる人類の増殖に應ずへからざる

は明々白々のことと云はざるへからず又ストレッケルか述ふる所に據り歐米の都會の次第に繁盛に赴くに隨ひ其人口増殖の驚くへき一例を擧げんに獨乙にて大都會の人口は近二十年間に凡そ一倍を増加し又北米合衆國の都會の人口は西曆千八百年代の始めには全國人口の百分の四なりしに今日は百分の二十五となれり就中新約克は西曆千八百九十年には百五拾壹万五千三百壹人なれとも今日迄の増加の割合にては今より五六十年の後には必ず貳千万人にも達すへし又ヒュームは百餘年前に於て倫敦の

人口が七十万に達せるを見て倫敦の人口は既に極度に達せり更に多數となるに至らば物價の騰貴非常にして到底市民か生計をなす能はざるは必然なりと云ひし程なりしに終に百餘年を経たる今日既に五倍して四百貳拾餘万となれり

人口と食料との比例漸く大なる不權衡を生ずるに至らば隨て物價の騰貴愈大なることよなるは必然なれば吾人は先づ第一に贅澤物の需用を止めざるを得ざることよなり酒類茶コーヒー菓子煙草等其他萬種贅澤物の製造は第一に衰ふるなるへし並に必要品と

雖價の騰貴するに隨ひ務めて廉價なる粗物を要することよなるへし又家畜の類は飼料を要すること夥しきものなれば務めて其飼養を減せざるを得ざるに至るへし而して家畜を減するに至りては肉、乳、卵等の如きは之を用ふへからざるのみならず從來乗車運車等に用ひたる牛馬等に代ふるに人力を以てせざるへからざることよなるへし又家畜の不足を告ぐるに至らば其價益騰貴せざるを得ざるのみならず獸毛、獸皮、獸脂、膠、石鹼等の類も亦非常の高價となるへく又獸獵の漸く盛なるに至るときは野獸も亦缺乏を生し隨て種

々の日用品の不足を感じるに至るは必然なり  
 獨り右等物品の不足を告ぐるのみならず木材の如き  
 も亦全く缺乏するに至るへし歐洲にては今より五十  
 年乃至百年の後には木材は既に大缺乏を生して如何  
 ともすへからざるに至るへしと云ふ獨乙の如きは其  
 面積の四分の壹は森林に屬すと雖用材は今日既に甚  
 た少なきに困しむ程のことなれば今日の人口より半  
 倍若くは一倍となるときは到底内國の供給のみを以  
 て足れりとすへきにあらざれば外國より輸入せざる  
 を得ざるに至ることなれども外國にても亦均く缺乏

を生すへく又假令外國にて缺乏を生せざるへしとす  
 るも其運搬費の爲めに非常の高價となるへきこと必  
 然なれば是に至りては其困難は實に言ふに忍ひざる  
 ものならんと云ふ

次て鑛物類の缺乏も亦頗る恐るへき結果を生すへし  
 諸鑛物中鐵、銅、鉛の類は猶土中にある分隨分夥多なる  
 か如しと雖金銀の類は決して甚た多からざるか如く  
 白鉛も亦甚た寡少なり白金并に水銀の如きは唯僅々  
 の地に出るものにして今日既に殆ど不足を感じる程  
 のことなり殊に石炭の如きは近今の開化に於て最も

必要缺くへからずして日に月に其需要の増加することなるか歐洲中最も多量の石炭を消費する各國及び北米合衆國にて西曆千八百六十五年に消費せる總噸數は一億六千八百拾九万七千噸なりしに夫れより十九年を経て西曆千八百八十四年には參億七千五百万千噸に増加せしと云ふ即ち殆ど一倍半の増加なり然るに同年に於て計算せる全地球中石炭採掘の總噸數は四億九百參拾八万五千五百拾五噸なる由なるか(此内日本にて採掘の噸數は七拾五万五千八百噸なりと云ふ)此總噸數の内にて右歐米の重立たる各國にて消費

する總計を差引けば殘餘參千四百參拾八万五百拾五噸となることにして此分は他の各國にて消費することなるへけれども右重立たる各國は勿論其他の各國の消費猶年々増加して今日は更に大なるものとなりしことなるへし日本にてさへも統計年鑑に據れば石炭の消費噸數年々増加せること左の如し

明治二十一年	百七万貳千七百四拾參噸
同 二十二年	百拾六万參千六百貳拾四噸
同 二十三年	百四拾參万貳百五拾貳噸
同 二十四年	百五拾八万參千八百參拾貳噸



右の如くなれば即ち三年間に殆ど十分の五を増加したるものなり猶此後年々の増加は更に大なるものならん

但し全地球採掘の噸數も更に年々増加すへきは必然なれども併し石炭は地層發達の第一代石炭紀の遺物にして後代更に新に生すへきものにあらされは決して無盡藏と稱すへからず消費するに隨て漸く其量を減するものなれば將來消費の量を増すに隨ひ愈缺乏を告ぐるは決して疑ふへきにあらざるなり北米合衆國及ひ支那の如きは石炭の量頗る多ければ容易に盡

くることはあらざるへしと雖其他に至りては其缺乏の期は決して遠からざるへしと云ふ英國の如きは消費の量今日の有様にて増加するときは今より百年にして全く盡くるに至るへく獨乙は凡そ八百年間は保續するを得へしとのことなり吾か日本の如きも前鑛山局長和田維四郎氏の報する所に據れば從來石炭の採掘方法宜しきを得ること多く且つ水力を用ひて適當なる處に妄に蒸氣力を用ふるか如きこと少からされば是等濫掘濫費の爲めに大に石炭缺乏の期を促進するの恐れありと云ふ然るに自國にて既に缺乏す

るに至りて外國より輸入せんとするときば其運搬費非常のことなれば到底自國の製造工作等の諸業を保續するの手段あらざることとなるべく果して此の如きに至りては獨り將來の開化を望むべからざるのみならず社會は遂に衰頽退化せざるを得ざるや必然なり然るに斯く石炭の缺乏するに至るときは山岳より洋海に注入する流水、海浪、瀑布、氣流若くは太陽熱等を利用し熱力を起して石炭に代用するの術を得るの望みありとの説あり將來物理學化學の進歩によりて遂に能く此偉業をなすに至らば吾人の幸福此上はあら

ざるへし

茲に食料に就て猶一言すべきものあり前述レブンス  
 タインの食料に關する計算は陸産のみにして絶て水  
 産に及ばざることなるか余か所見にては近頃は歐米  
 各國共に魚介海草等の増殖の方法を講ずること漸  
 く開くることとなりたれば此方法の進歩によりては  
 多少陸産の不足を補充するを得るは必然なるへしと  
 信す日本の如き海國にありては其方法の宜しきを得  
 ることあらば水産の増殖は隨分夥しきものなるへし  
 明治元年以來水産物の輸出は年々に増加して元年に

は輸出水産物の價僅に五拾六万六千七百九拾八圓なりしに二十二年には參百四拾六万貳千五百四拾圓となりしことなれば其増加五倍餘に當ることにして蠶糸及び製茶の輸出増加よりも遙に大なることなり但し魚介海草の類に至りては固より本食とすべきものに非ざるのみならず是等の物か假令非常に増加したりとて無盡藏的に増殖する人口を養ふに足らざるは勿論なれども併し陸産食料の缺乏を補ふことは決して少からざるへしと思はる

次に吾人の住居地のことなるか人口益増殖して既に陸地に餘地なきに至らば已むことを得ず池沼湖水又は波濤靜穩なる海灣等に於て船中に住居する歟又は太古野蠻民か水中に建てたる所謂杭屋の如きものを造りて住居する様なることも出來得へし既に支那にては人口稠密なる場處にては往々船居する者もありと云ふ但し此水中住居とても前述の如き場處に限ることにして決して大洋海中に住居の出來得へきことにあらざれば是亦限りあるは勿論なれども併し幾分か陸上住地の缺乏を補ふの効なきに非ざるへし然れども以上は皆畢竟一時の姑息策に過ぎされば永

遠無盡藏に増殖する人口の衣食住を充たすへき方策なるものは到底絶無と云ふの外あらざるへし

### 第三章 結論

從來開化進歩の勢ひより豫想するときは今後の一二百年間は吾人が最も多望の時と云はざるを得ず今後の一二百年間に於ける學藝及び製造工業の進歩發達は如何の點に迄到るへきや恐らくは従前の千年二千年にして曾て成し能はさりし偉大の効果を奏するに至るならん而して其最も著大なるもの一二を擧ぐれば蓋し風船は全く實用的のものとなりて吾人が往來交通の大利便を加ふるならん又全世界各地互に電話を用ふることとなりて電報の迂遠を笑ふにも至るな

らん(近日の新約克新聞に據れば獨乙にては伯林より  
 ハンノーベルを経てユェルンに至る迄凡そ日本里數  
 にて百五十餘里の間に電話線の架設中なりと云ふ歐  
 洲各大都府等の間に電話通信をなすに至るは恐らく  
 は數年を出てさるへしと思はる(其他西比利亞鐵道は  
 全通の功を奏して亞歐の交通を迅速且つ安全にする  
 ならん并に巴奈馬の掘割も成就すへし英佛間地底鐵  
 道も出来るならん其他政治上のことに至りては印度  
 及ひ濠太利か獨立國となるにも至るならん日本支那  
 か歐洲各國と眞實富強を均くするの地位に進むは必

然ならん或は世界強大國か相合して一大聯邦となる  
 の氣運も來るならん

前途一二百年は吾人か斯くも多望を抱く所の世紀な  
 るにも拘はらす且つ吾人々類は前述の如く天文物理  
 的に猶長遠なる命數を保ち得へきにも拘はらす唯社  
 會經濟的原因により遂に永く快樂なる生存を遂く  
 ること能はずして衰頽に向ふの不幸に遭遇せんとす  
 るは實に悲歎に堪へざることと云ふへし而して其極  
 度は即ち今より凡そ二百年以内にあることなれば宛  
 かも貞享元祿の頃より今日迄の年數に過ぎずして既

に旦夕に迫れるか如き思ひなき能はざるなり果して然らば到底吾人か之を救ふの策あらずとして唯拱手して自然の成行に任せ以て其時の到るを俟つべき乎否々吾人到底之を救ふの策あらずとするも假令一時姑息の策と雖力の及ばん限り之を試みざるを得ざるべし然らば則ち其策は如何すべきやと云ふに茲に二策の在るあり而して一は積極的に屬し二は消極的に屬す即ち積極的の策は農業化學及び農業經濟學等其他諸學科の進歩發達を促して食料及び其他需要品の増殖に就て研究すること又消極的の策は人類生誕の

數を限制する方法に就て研究すること是れなり積極的の策は學術上のことなれば余輩は唯茲に希望を述べて専門學者の研究を祈るの外なし又消極的の策に至りてはマルサス以來社會學者經濟學者等の最も苦慮する所なれども法律を以て吾人の婚姻に制限を置くの外に一策もあらざることなるか婚姻制限の方法も種々の案あれども殆ど一も成功あるべき見込のものばあらざるなり但し其案の重なるもの三種あり第一妻子を養ふに足るべき歳計の見込ある者に限り婚姻を許すこと第二婚姻税を課して婚姻を容易

ならしめざることを第三男女婚姻の年齢を高く定むること即ち是れなり然るに是等のことは皆甚だ困難なることにして容易に行はるべきにあらず加之假令之を實際に行ひ得へしと假定するも之れに由て私通野合或は賣淫を増すこと甚だしく隨て私生子の生誕も亦大に増すべきは必然にして何の効能もあらざるのみならず私生子の社會の風俗に大害あるは既に識者の憂慮する所なれば是等の策も到底有害無益に歸するなり但し猶此外に外國若くは殖民地移住を獎勵するの策を説く所の學者あれども此策は一國內の爲め

には是なれども全世界人口の増殖を制限するの策としては何の用をもなさざるなり  
果して此の如くなれば猶此外に明案の出つべきや否は之を豫想し得へからずと雖恐らくは甚だ難かるべし一種の學者の説には法律を以て婚姻を制限するか如きは決して出來得べきことにあらざれば宗教徳教及びひ知育によりて婚姻の容易にすべからざる所以を説き能く妻子を養ひ得べき者のみか婚姻をなすの風俗を養成し且つ私通野合賣淫の道德に反する所以を教誨して以て妾に人口の増殖を防ぐの外一も施すべ

きの術あらずと云ふと雖是亦殆と言ふへくして行ふへからざるものならん果して然る以上は人口増殖を防ぐの術は到底絶無とせざるを得ざるなり  
 余の所見を以てすれば人口の増殖するに隨て墮胎の増加するは必然にして此外は到底人口減少の術あらざるへければ後世已むを得ざるに至らば遂に墮胎を公許するの時機來るましきにもあらざるへしと豫想せざるを得ざるなり野蠻未開の人民は其生誕する丈けの人口を養ふを得ざるか爲めは生兒殊に女兒を殺すこと多きことなるか將來の大文明人民にして其生

誕する丈けの人口を養ふこと能はざるか爲めに遂に墮胎を公許するに至るへしとは甚た奇怪の至りなるか如しと雖人口増殖の爲めに遂に社會の維持をなす能はざるの不幸を救ふの術一もあらざるに至りては實に如何ともすへからざるならん但し余は決して之を希望するにあらず唯前途の成行遂に此の如き場合に至らんことを想像するのみ  
 以上論述せし所の如くなれば今より凡そ二百年を経たる後の人類界の有様は如何なる悲惨の境遇に陥るへきや蓋し夫れ迄には貧民の増加すること年一年に



多く隨て社會黨共產黨虛無黨の類非常に蔓延するに至るへきは敢て疑ふへからざるか如し果して此の如くなるに至りては人類界は遂に極めて悲惨なる生存競争の修羅場とならざるを得ざるへし然れども或は後世學術の進歩發達によりて能く之を救ふへき大妙策出るの時あるへきや否余輩は之を切望するの外なきなり

終結に臨み猶一言せざるへからざるものあり吾人か右の如く僅々二百年許にして社會經濟的に衰頽すへしとするの學説は或は猶稍未定の問題とすへきもの

なるやも知るへからすと雖併し吾人か千万年若くは二千万年の後に至り天文物理的に亡滅に歸すへしとの學説に至りては明々白々敢て疑ふへからざるものなれば吾人の子孫か永遠此地球上に生存し得へきものとは決して思惟すへからざるなり果して然らば地球上人類の命數は甚だ短小なるものと云はざるを得ず何となれば吾人々類の心を以て考ふれば千万年二千万年は極めて長久なるものゝ如しと雖併し第一章に説けるか如く吾か地球は發生以來今日迄少なくとも六千餘万年を経たることにして猶此後亡滅の時に至

る迄幾億万年の年數を經へきや計るへからさるに人類は第一章に説ける如く發生以來僅々二十万年乃至十万年にして此後假令千万年乃至二千万年を生き延ぶるも地球の命數(地球は有機物ならされとも假に命數の字を用ふ)に比すれば其差ひ甚た大なることにして實に瞬間と云ふも可なるものなればなり然るに古來の學者は此世界は即ち人類の爲めに存在するものにして人類と世界と共に無窮に生存するものと認めたることなるか是れ全く理學の未だ開けざるより所謂目的主義を信して天地には必ず目的の存

在するものと信したるより起れる妄想に外ならさるなり今日理學的に考察するときば天地には一の目的なるものあらず獨り因果の天則の行はるゝのみなれば吾人々類か此地球に發生したるは天地の目的によりて發生したるにあらず地球の發達か人類の發生せざるへからさる原因となり其結果として發生したるなり故に又地球の衰頽か人類の亡滅せざるへからさる原因となるに至るときは其結果として人類は遂に亡滅に歸せざるを得ざるなり是に由て之を視れば地球と人類とは決して永遠離るへからさる關係を有す

るものにはあらず唯僅々一時の關係を有するものと  
認むべきなり

# 二百年後の吾人終

全 明治二十七年三月廿七日印刷  
年 全月卅一日發行



著 作 者  
發 行 者  
印 刷 者  
印 刷 所  
發 行 所  
賣 捌 所

定價十五錢

東京市麹町區上二番町四十四番地

加藤 弘之

同本郷區本郷六丁目五番地

井上 圓成

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目二十三番地

根岸 高光

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

株式會社 秀英舎 第一工場

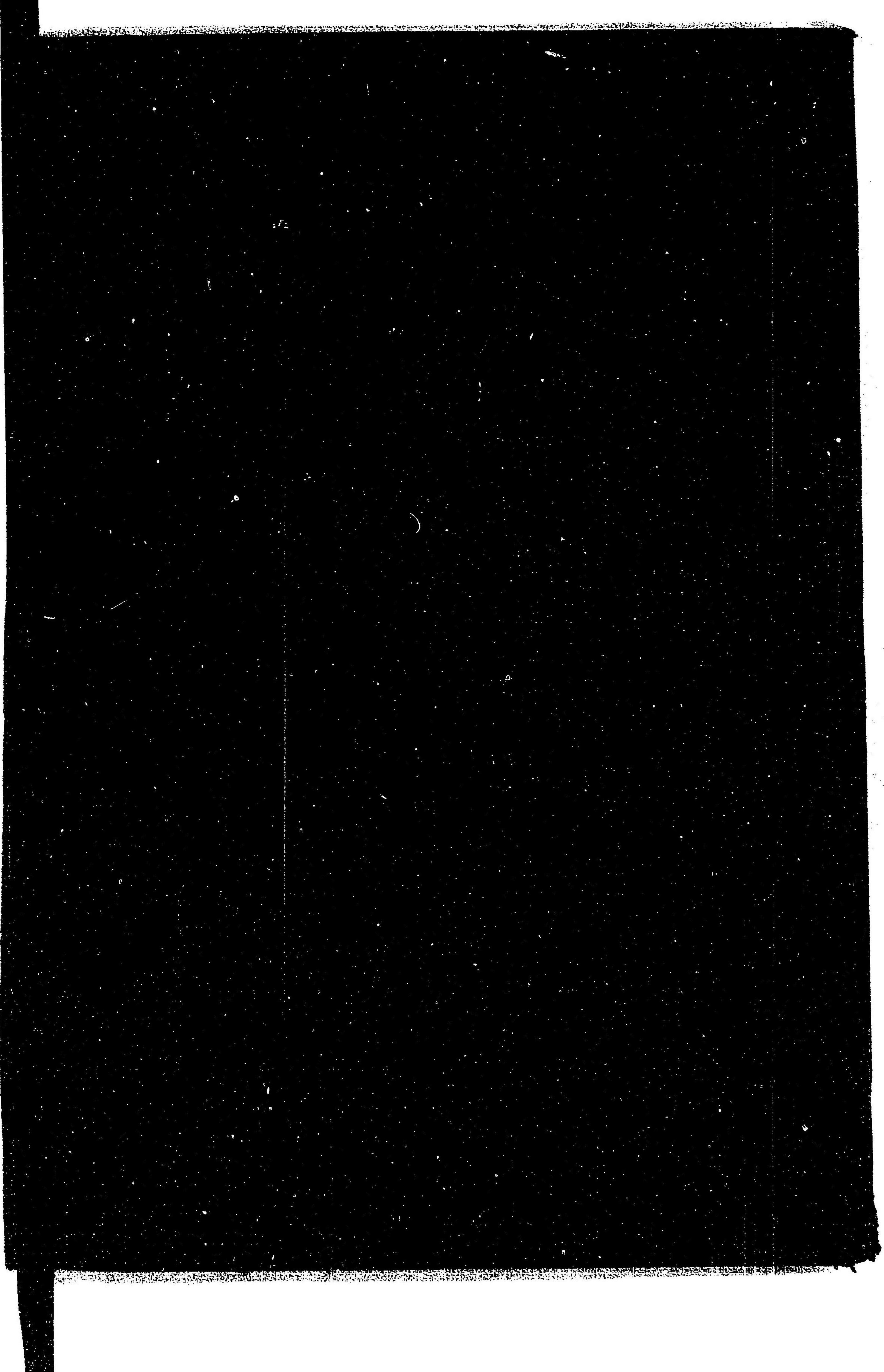
東京市本郷六丁目

哲學書院

大坂 松村九兵衛  
大坂 小林新兵衛  
大坂 梅原龜七郎  
熊本 長崎次郎



18  
411



039670-000-7

18-411

二百年後の吾人

加藤 弘之/著

M27.3

BDA-0250

